

Child Behavior Checklist/4-18 (CBCL) による 被虐待児の行動と情緒の特徴

—— 児童養護施設における調査の検討 ——

坪井 裕子*

本研究の目的は児童養護施設に入所している虐待を受けた子どもたちの行動と情緒の特徴を明らかにすることであった。児童養護施設に入所中の子ども142人(男子: 4~11歳40人, 12~18歳45人, 女子: 4~11歳25人, 12~18歳32人)を対象に, Child Behavior Checklist (CBCL)の記入を職員に依頼した。その結果, 女子は男子に比べて内向尺度得点が高く, 特に高年齢群女子は身体的訴えと社会性の問題の得点が高かった。被虐待体験群($n=91$)と被虐待体験のない群($n=51$)に分けて比較したところ, 社会性の問題, 思考の問題, 注意の問題, 非行の行動, 攻撃的行動の各尺度と外向尺度, 総得点で, 被虐待体験群の得点が有意に高かった。被虐待体験群は, 社会性の問題, 注意の問題, 攻撃的行動, 外向尺度, 総得点で臨床域に入る子どもの割合が多かった。虐待を受けた子どもの行動や情緒の問題が明らかになり, 心理的ケアの必要性が示唆された。

キーワード: Child Behavior Checklist/4-18 (CBCL), 児童虐待, 児童養護施設, 行動と情緒の問題

問題と目的

近年, 虐待を受けた子どもたちが児童養護施設に保護されることが増え, 施設側の対応が課題となっている(高橋, 2000)。何らかの虐待を受けて児童養護施設に入所している子どもたちに対する心理的ケアを進めるにあたって, まず児童養護施設に入所している子どもたちの情緒や行動の特徴を明らかにする必要がある。特に, 虐待を受けてきた子どもたちに焦点を当て, 児童養護施設に入所している子どもたちの行動と情緒の問題を客観的な指標を用いて検討することは, 今後の対応を考える上でも意味が大きいと思われる。

虐待によって子どもが受ける影響については様々な研究がなされており, 虐待のサブタイプと虐待を受けた年齢による発達への影響の違いを検討したもの(Manly, Kim, Rogosch, & Cicchetti, 2001), 身体的虐待児とネグレクト児について, それぞれの学業面と情緒面での問題を指摘したもの(Wodarski, Kurtz, Gaudin, & Howing, 1990; Kendall-Tackett & Eckenrode, 1996), ネグレクトが子どもに与えるダメージに言及したもの(Erickson & Egeland, 1996; Crittenden, 1992), ネグレクト児の認知や学業などの発達への影響を愛着形成との関

係から論じたもの(Hildyard & Wolfe, 2002)などがある。

日本においては諏訪(1995)が小児科を受診した117例の被虐待児について検討している。それによると身体所見では成長・発育障害を挙げ, $-2SD$ 以下の低身長の子どもの71人見られ, さらに約半数に知能の低下が認められたとしている。また, 奥山(1997)は, 虐待を受けた子どもの問題として, 発達上の問題と心的外傷を挙げている。心的外傷の問題としては, いわゆる心的外傷後ストレス障害(PTSD)が現れるとしている。虐待を受けた子どもたちは, 彼らの表す症状や状態によって, DSM-IV (American Psychiatric Association, 1994)の診断分類上, 解離性障害, 行為障害, 反抗挑戦性障害, 注意欠陥多動性障害, あるいは幼児の場合, 反応性愛着障害と診断される場合もある(ZERO TO THREE / National Center for Infant, Toddlers, & Families, 1994)。大迫(1999)は虐待を背景にもつ非行小学生に対する児童自立支援施設での治療教育から, 反社会的な逸脱行動のほか, 対人関係上の問題, 感情調節の問題, 多動や身体的訴えなど様々な問題を挙げている。非行と被虐待体験の関連の指摘(藤岡, 2001)や, 落ち着きのなさを主訴とする被虐待児の事例報告(坪井, 2002)などもある。このように臨床場面では, 虐待された子どもたちの様々な特徴が指摘されている。しかし, わが国では実際に客観的なアセスメントツールを用いて子ど

* 名古屋大学大学院教育発達科学研究科
b021208d@mbox.nagoya-u.ac.jp

もたちの特徴を調査した研究はまだ少ない。

児童養護施設に入所中の子どもに関する調査として、西澤・中島・三浦 (1999) は TSCC (Trauma Symptom Checklist for Children) を用いて、子どもの虐待体験とトラウマ反応の関連を明らかにしている。施設に入所している子どもは一般の子どもに比べて、有意に「不安」「易怒性」「軽度の侵入性症状及び回避性症状」「自尊心の欠如」が高く認められ、そのうち虐待を受けた子どもには、さらにその傾向が強く認められたとしている。斉藤 (2001) は児童養護施設に入所している子どもとその親についての調査を報告している。児童養護施設に入所している虐待を受けた子どもたちに見られた特徴として「知的発達の遅れ」「仲間とうまく関係が結べない」「多動・落ち着きのなさ」「怒りっぽさと反抗」などを挙げている。杉山・中村 (2001) は Child Behavior Checklist (CBCL) を用いて児童養護施設に入所している子どもの問題行動について調査し、施設形態の違いが子どもの問題行動に影響を与えていると述べている。このように、実際に児童養護施設に入所している子どもたちの行動や情緒の特徴についての調査報告は、最近になってようやく取り上げられるようになってきたものの、まだ、虐待を受けた子どもたちの実態が実証的に把握されているとはいいがたい。そのため、子どもたちの実態を客観的なアセスメント指標を用いて検討する必要があると考える。

子どもの行動や情緒の特徴を見ていく客観的なアセスメント指標としては、Achenbach (1991) が開発した Child Behavior Checklist/4-18, (CBCL4 歳～18 歳用、以下 CBCL と略記) がある。Achenbach は子どもの行動と情緒の問題を把握するものとして、保護者が記入する CBCL, 自己記入式の Youth Self Report (YSR), 教師が記入する Teachers Report Form (TRF) などの一連の質問紙を開発している。そのうち CBCL は保護者が記入する子どもの行動と情緒を包括的に評価するチェックリストで、コンピテンス (日常の活動や、友人や親との関係、学業成績など) の項目と、問題行動の項目 (尺度 1「引きこもり」、尺度 2「身体的訴え」、尺度 3「不安・抑うつ」、尺度 4「社会性の問題」、尺度 5「思考の問題」、尺度 6「注意の問題」、尺度 7「非行の行動」、尺度 8「攻撃の行動」、[その他の問題]) で構成されている。さらに、2 つの上位概念¹ (尺度 1, 2, 3 の合計から求められる内向尺度; Internalizing と、尺度 7, 8 の合計から求められる外向尺度; Externalizing), および総得点からプロフィールが求められる。この CBCL は欧米各国で広く使われている質問紙である。特にプロフィールから得られる T スコアによって、臨床域と境

界域、一般域の弁別に優れているといわれている。Armsden, Pecora, Payne, & Szatkiewicz (2000) は、不適切な養育 (maltreatment) を受けた子どもたちの長期にわたる里親でのケアや施設入所時のアセスメントに CBCL が用いられた例を紹介している。日本では、杉山・中村 (2001) のほか、自閉症の子どもに用いた坂野・佐藤・佐々木・久保・坂爪・土肥・市井 (1995) の例があるものの、臨床的に用いられている例はまだ少ない。そこで、本研究では今後の臨床的応用と国際比較の可能性も視野に入れて、日本で標準化がなされた CBCL /4-18 (井濶・上林・中田・北・藤井・倉本・根岸・手塚・岡田・名取, 2001) をアセスメント指標に用いることとする。

以上のことから、本研究では、児童養護施設に入所している子どもたちの行動と情緒について、客観的なアセスメント指標に CBCL を用いて施設職員から見た子どもたちの特徴を明らかにすること、さらに被虐待体験と子どもの行動や情緒の問題との関連を明らかにすることを目的とする。本研究によって、今後の心理的ケアや生活面での対応に何らかの示唆が得られることが期待される。

方 法

対象 A 県内の大都市およびその近郊の児童養護施設 (6 施設) に入所中の 4 歳から 18 歳の子ども 143 人を対象とし、各施設の担当職員に対象児について CBCL の記入を依頼した。そのうち欠損値のあるデータを除いた 142 人 (男子 85 人, 女子 57 人; 平均年齢 11.78 歳, $SD=3.22$) を分析対象とした。対象児の内訳は、TABLE 1 に示すとおりである。

TABLE 1 対象者の内訳

	幼児	小低	小高	中学生	高校生	計
男子	7	7	33	32	6	85
女子	3	7	17	19	11	57
合計	10	14	50	51	17	142
小低は小学 1 年～3 年						(人)
小高は小学 4 年～6 年						

¹ Internalizing と Externalizing の日本語訳について、菅原・北村・戸田・島・佐藤・向井 (1999) は Internalizing (内在的), Externalizing (外在的) とし、戸ヶ崎・坂野 (1998) は訳さずそのまま原語を用いている。本研究では先行研究 (井濶他, 2001; 杉山・中村, 2001) にない、内向尺度・外向尺度という訳語を用いるが、「内向」「外向」という言葉は introvert, extrovert の訳語と混同される恐れがあり、注意が必要である。

方法 調査には日本版 CBCL/4-18 (井潤他, 2001) を用いた。各施設で対象となる子どもの生活担当職員に、調査について説明した後、質問紙記入を依頼し、一定期間後に回収した。質問紙はコンピテンス項目(日常的な活動内容, 友人数, 友人と遊ぶ頻度, きょうだい・友人・親との関係, 自立性と学業成績)と, 113項目の問題行動項目から構成されている。コンピテンス項目のうち, 子どもの活動については内容の記入を求め, 対人関係(友人, きょうだい, 親子)や成績などの項目は4件法(一部3件法)で記入を求めた。問題行動項目については, 子どもの状態が良くあてはまる場合には2, ややまたは時々あてはまる場合には1, あてはまらない場合には0で回答を求めた。記入は無記名で行った。デモグラフィックデータとして, それぞれの子どもの入所理由, 入所期間, 家族状況(家族構成, 親の障害, 病気等)や, 被虐待体験(体験の有無, 虐待内容, 虐待者)などについて, フェイスシートに記入を求めた。施設によっては, 直接, 職員から聞き取り調査を行った。今回, 記入した職員の年齢・経験年数などのデータは得られなかった。なお, 分析には SPSS for Windows 10.0 J を使用した。

結 果

児童養護施設入所児全体の特徴

入所状況および施設間差異の検討 対象となった子どもたちの家族構成では, 母子家庭が最も多く(50人), 次いで父子家庭(44人), 両親無し(23人)の順であった。入所理由(複数回答あり)では, 親の離婚が最も多く(76人), 次いで経済的理由(55人), 虐待(40人)の順であった。誰に虐待されたか(複数回答あり)については, 実母が最も多く(73人), 次いで実父(29人), 継父(8人)の順であった。

杉山・中村(2001)の調査では施設形態によって子どもの問題行動に差があると指摘している。そこで, 本研究で対象となった6施設間に差異があるのかを確認するため, 施設形態別の比較を行った。今回, 一寮舎の定員が8人以下の小舎制施設はなかったので, 一寮舎14人以下の中舎制(58人)と一寮舎15人以上の大舎制(84人)に分け, 各尺度得点, 上位概念, 総得点のそれぞれについてt検定を行った。その結果, いずれにも有意な差が見られなかったため, 6施設をあわせて考えることとした。

年齢・性別による特徴 対象児を井潤他(2001)のデータと比較するために, 井潤他と同様に低年齢群(4歳~11歳:65人)と高年齢群(12歳~18歳:77人)に分けた。高年齢群については, 井潤他(2001)のデータは15歳まで

を対象としているので, 参考のため12~15歳群(63人)と16~18歳群(14人)に分けて両群の各尺度と上位概念, 総得点の平均得点を比較したところ, 有意差は認められなかった。標準化されていない16~18歳のデータの扱いは本来慎重にすべきであるが, 今回得られた貴重なデータを活かすために12~15歳群と16~18歳群を合わせて高年齢群とした。各年齢群の各尺度, 上位概念, 総得点の平均値, 標準偏差, およびTスコア換算時の臨床域(境界域を含む)に入るカットオフポイントを男女別に示したものがTABLE 2である。井潤他(2001)と比較してみると, ほぼすべての尺度において児童養護施設入所児の方が高得点を示している。

年齢, 性別を独立変数として二元配置の分散分析を行ったところ, 交互作用が「身体的訴え」($F(1,138)=7.55, p<.01$)と「社会性の問題」($F(1,138)=4.44, p<.05$)で有意となった。単純主効果を検討した結果, 「身体的訴え」で, 高年齢群では女子が男子より高得点($F(1,138)=7.66, p<.05$), 女子では高年齢群が低年齢群より高得点($F(1,138)=5.15, p<.05$)であった。「社会性の問題」では, 高年齢群で女子が男子より得点が高かった($F(1,138)=8.02, p<.05$)。

年齢差について, 井潤他(2001)では, 総得点で低年齢群が高年齢群より高い得点を示し, 尺度別の年齢差では「身体的訴え」のみ高年齢群が低年齢群より高いという特徴が挙げられている。しかし, 今回の施設入所児のデータでは, 年齢の主効果は見られなかった。

男女差について, 井潤他(2001)は外向尺度で男子が女子より高得点であり, 内向尺度では女子が男子より高得点を示すとしている。尺度別の男女差については「社会性」「注意」「非行」「攻撃性」の各尺度で, 男子が女子より高得点, 「不安・抑うつ」「身体的訴え」で女子が男子より高得点であるとしている。本研究では, 性別の主効果は内向尺度のみ($F(1,138)=4.13, p<.05$)で見られ, 井潤他(2001)と同様, 女子が男子より高得点だった。外向尺度では男女とも高得点を示し, 男女差は見られなかった。

各尺度得点およびコンピテンス得点の相関 各尺度得点とコンピテンス得点の相関をTABLE 3に示す。コンピテンス項目のうち, きょうだい関係では一人っ子を除外し, 成績は各教科の成績得点の平均を用いた。各尺度間には有意な相関が見られ, 特に内向尺度と外向尺度($r=.47, p<.01$)は, 中程度の正の相関を示した。コンピテンス項目間では, 友人数と, 友人と遊ぶ頻度($r=.21, p<.05$), 友人関係($r=.35, p<.01$), 自立性($r=.18, p<.01$)のそれぞれとの間に有意な正の相関

TABLE 2 年齢群別各尺度得点の平均と SD

		低年齢群			高年齢群			主効果・交互作用
		平均	SD	カットオフ	平均	SD	カットオフ	
1 引きこもり	男子	1.60	1.75	4.00	2.04	2.31	5.00	高年齢において女子>男子* 女子において高年齢群>低年齢群*
	女子	2.20	2.33	5.00	2.84	3.06	5.00	
2 身体的訴え	男子	0.60	1.01	3.00	0.29	0.87	4.00	
	女子	0.32	0.63	3.00	0.88	1.04	4.00	
3 不安・抑うつ	男子	2.18	2.64	6.00	1.91	2.67	7.00	高年齢において女子>男子*
	女子	2.60	3.18	9.00	3.63	4.78	8.00	
4 社会性の問題	男子	3.13	3.49	7.00	2.49	2.50	6.00	
	女子	2.92	3.05	6.00	4.41	2.59	6.00	
5 思考の問題	男子	0.65	1.79	2.00	0.38	1.11	2.00	
	女子	0.48	1.08	2.00	0.75	1.48	2.00	
6 注意の問題	男子	4.75	4.12	9.00	3.31	2.40	9.00	
	女子	3.92	4.41	8.00	4.81	3.23	8.00	
7 非行的行動	男子	2.15	3.21	4.00	2.11	3.86	4.00	
	女子	2.00	2.24	3.00	2.44	3.38	3.00	
8 攻撃的行動	男子	6.70	6.77	14.00	4.33	6.33	12.00	
	女子	5.72	5.13	13.00	7.78	7.89	10.00	
その他の問題	男子	2.10	2.17		1.73	3.23		
	女子	2.00	1.71		2.72	2.87		
内向尺度	男子	4.30	4.42	8.00	4.18	4.36	7.00	性別の主効果 女子>男子*
	女子	4.96	4.71	8.00	7.16	7.19	8.00	
外向尺度	男子	8.82	9.58	11.00	6.44	9.87	7.00	
	女子	7.72	6.74	9.00	10.22	10.99	6.00	
総得点	男子	22.20	20.34	29.00	17.36	18.86	22.00	
	女子	20.60	15.45	33.00	28.28	21.40	27.00	

** $p<.01$ * $p<.05$

注) カットオフポイントは井瀬他(2001)による

TABLE 3 CBCL 各尺度とコンピテンス項目との相関

		尺度1	尺度2	尺度3	尺度4	尺度5	尺度6	尺度7	尺度8	その他	内向	外向	総得点	成績	友人数	頻度	きょうだい	友人関係	親子	自立性
CBCL 問題行動 尺度	1 引きこもり																			
	2 身体的訴え	.31**																		
	3 不安・抑うつ	.57**	.35**																	
	4 社会性	.49**	.37**	.47**																
	5 思考	.44**	.32**	.62**	.42**															
	6 注意	.52**	.38**	.53**	.71**	.48**														
	7 非行	.28**	.04	.47**	.38**	.51**	.49**													
	8 攻撃	.27**	.10	.53**	.54**	.49**	.59**	.80**												
	その他	.47**	.25**	.58**	.52**	.56**	.57**	.72**	.65**											
	内向尺度	.83**	.52**	.91**	.56**	.62**	.61**	.42**	.46**	.60**										
コンピ テンス	外向尺度	.29**	.09	.53**	.51**	.52**	.58**	.91**	.98**	.71**	.47**									
	総得点	.57**	.34**	.75**	.72**	.67**	.78**	.81**	.88**	.83**	.77**	.89**								
	成績	-.11**	-.11	-.14	-.29**	-.23	.44**	.33**	.37**	-.22*	-.15	-.37**	-.37**							
	友人数	-.36**	-.11	-.26**	-.27**	-.25**	-.30**	.26**	.12	.30**	-.33**	-.18*	-.30**	.29**						
	遊ぶ頻度	-.06	.01	-.11	-.06	-.14	-.09	-.12	-.07	-.03	-.09	-.09	-.10	.21*	.21*					
	きょうだい関係	-.13	.05	-.10	.02	-.00	-.14	-.22*	-.13	-.17	-.11	-.16	-.15	.11	.12	.11				
	友人関係	-.34**	-.13	-.36**	-.39**	-.24**	-.40**	-.33**	.41**	.27**	-.39**	-.40**	-.46**	.37**	.35**	.14	.07			
	親との関係	-.09	.12	-.12	-.01	.07	.11	-.05	-.14	-.02	-.09	-.11	-.10	.04	.05	.02	.23*	.30**		
	自立性	.22*	-.09	-.22*	-.28**	-.09	-.41**	-.21*	-.29**	-.26**	.24**	-.28**	-.34**	.38**	.18*	.05	.03	.43**	.26**	

** $p<.01$ * $p<.05$

がみられた。コンピテンス得点と各尺度得点との相関を求めたところ、友人数と「引きこもり」,「不安・抑うつ」,「社会性の問題」,「思考の問題」,「注意の問題」,「非行的行動」,「その他の問題」,内向尺度,外向尺度,総得点のそれぞれとの間に有意な負の相関が見

られた。友人関係との相関では,上記に加え,「攻撃性」との間に有意な負の相関があった。親子関係と各尺度との相関では,有意な相関は見られなかった。自立性と各尺度の相関では,「引きこもり」,「不安・抑うつ」,「社会性の問題」,「思考の問題」,「注意の問題」,

「非行的行動」,「攻撃的行動」,「その他の問題」,内向尺度,外向尺度,総得点のそれぞれとの間に有意な負の相関が見られた。コンピテンス得点の高いほうが,問題行動得点が低い傾向が示された。

被虐待児にみられた特徴

被虐待体験と各尺度得点との関連 対象者142人を,何らかの被虐待体験の有無によって被虐待体験のある群 (Abuse 群: 以下A群とする) 91人 (男子53人,女子38人) と,被虐待体験のない群 (Non Abuse 群: 以下N群とする) 51人 (男子32人,女子19人) に分けた。児童相談所からの書類上,入所理由が明確に虐待とされていなくても,フェイスシートと各施設での聞き取りによって,実際に何らかの虐待を受けた経験があると考えられたものは,被虐待体験がある群 (A群) とした。A群とN群の各尺度と上位概念,総得点を比較した結果,「社会性の問題」,「思考の問題」,「注意の問題」,「非行的行動」,「攻撃的行動」,「その他の問題」,および外向尺度,総得点で有意な差が見られた。いずれも被虐待体験のあるA群のほうが高い問題行動得点を示した (TABLE 4)。次に,虐待体験によって差異がみられる項目を確認するため,各項目についてマンホイットニーのU検定を行った。その結果,A群の問題行動得点が有意に高かった12項目を TABLE 5 に示した。

被虐待体験と入所状況,コンピテンス項目の関連

A群とN群の入所状況およびコンピテンス項目での差異を見るためにt検定を行った (TABLE 6)。その結果,A群とN群の間に,現在の年齢 (A群: $M=11.4$, $SD=3.4$, N群: $M=12.4$, $SD=2.9$) や性別の有意差はなかったが,入所時点の年齢 (A群: $M=6.3$, $SD=3.7$, N群: $M=4.8$, $SD=3.3$) では,A群の入所年齢が有意に高く ($t=2.38$,

$p<.05$),入所期間ではA群が有意に ($t=3.87$, $p<.01$) 短かった。コンピテンスでは,きょうだい関係 ($t=2.46$, $p<.05$) と成績 ($t=2.07$, $p<.05$) で有意差が見られた。いずれもA群の得点が低く,きょうだい関係,成績とも悪いという結果であった。

虐待タイプによる比較 被虐待体験のあるA群の91人を,フェイスシートと各施設での聞き取りによって,虐待のタイプ別 (ネグレクト,身体的虐待,心理的虐待,性的虐待) に分けた。重複の場合は,主たる虐待で分類した。ただし身体的虐待とネグレクトの重複は身体的虐待を主として分類し,ネグレクト群には身体的虐待を受けた子どもが入らないようにした。心理的虐待のみ (4人) と性的虐待のみ (1人) は対象者が少ないため,虐待タイプ別の分析から除外し,被虐待経験のないN群 (51

TABLE 4 CBCL 被虐待体験有無別の各尺度の平均と標準偏差

	N群		A群		t 値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
1 引きこもり	1.92	1.70	2.24	2.70	0.87
2 身体的訴え	0.33	0.68	0.62	1.04	1.94
3 不安・抑うつ	1.98	2.35	2.78	3.80	1.36
4 社会性の問題	2.39	2.41	3.62	3.19	2.58 *
5 思考の問題	0.24	0.59	0.74	1.68	2.58 *
6 注意の問題	3.27	2.67	4.66	3.87	2.51 *
7 非行的行動	1.33	1.75	2.65	3.84	2.79 *
8 攻撃的行動	4.04	4.27	7.13	7.55	3.12 **
その他の問題	1.39	1.50	2.51	3.04	2.92 **
内向尺度	4.16	3.59	5.51	5.99	1.68
外向尺度	5.37	5.55	9.78	10.93	3.19 **
総得点	15.67	11.12	25.16	22.32	3.38 **

** $p<.01$

* $p<.05$

TABLE 5 被虐待体験群が高得点だった項目

項目	尺度	項目の内容	N群 平均(SD)	A群 平均(SD)	z
56-c	身体的訴え	吐き気、気分が悪い	0.00(0.00)	0.10(0.34)	2.17*
13 61	注意の問題	混乱したり、訳がわからなくなっているようにみえる 学校の成績が悪い	0.06(0.31) 0.61(0.80)	0.29(0.60) 0.87(0.78)	2.70** 2.03*
81	非行的問題	家の中で盗みをする	0.02(0.14)	0.20(0.50)	2.50*
7 19 74 68 87 93 104	攻撃的行動	自慢したりうそぶいたりする たくさん注目を引きたがる 目立ちたがり屋でおどけたりする よくわめく 気分や感情が突然変わる しゃべりすぎる 普段より騒々しい	0.25(0.48) 0.14(0.40) 0.20(0.45) 0.01(0.36) 0.22(0.46) 0.18(0.48) 0.06(0.24)	0.54(0.67) 0.45(0.69) 0.40(0.61) 0.24(0.50) 0.49(0.71) 0.43(0.67) 0.31(0.53)	2.56* 2.95** 2.01* 1.99* 2.36* 2.48* 3.11**
79	その他	しゃべり方の問題	0.04(0.20)	0.21(0.48)	2.36*

** $p<.01$

* $p<.05$

TABLE 6 CBCL 被虐待別コンピテンス得点平均とSD

	N群(<i>n</i> =51)		A群(<i>n</i> =91)		<i>t</i> 値
	平均	SD	平均	SD	
友人数	2.92	0.96	2.90	0.84	-0.13
遊ぶ頻度	1.53	0.67	1.54	0.73	0.70
きょうだい関係	2.19	0.52	1.90	0.59	-2.46 *
友人関係	1.96	0.53	1.91	0.53	-0.53
親との関係	1.76	0.60	1.76	0.62	-0.06
自立性	1.88	0.59	1.76	0.54	-1.27
成績	2.37	0.83	2.05	0.93	-2.07 *
年齢	12.43	2.85	11.41	3.37	-1.83
入所期間	7.68	4.09	5.12	3.70	-3.78 **

***p* < .01**p* < .05きょうだい関係のみA群(*n*=76) N群(*n*=37)

人)とネグレクト群(66人)・身体的虐待群(20人)の3群で分散分析を行った。

デモグラフィックデータの分析では、入所年齢($F(2,134)=4.30, p<.05$)、入所期間($F(2,134)=8.28, p<.01$)で有意差が見られた。多重比較(TukeyのHSD法)の結果、入所年齢ではN群($M=4.8$ 歳, $SD=3.3$)と身体的虐待群($M=7.4$ 歳, $SD=3.5$)間で有意差($p<.01$)が見られた。入所期間ではN群($M=7.7$ 年, $SD=4.1$)とネグレクト群($M=5.8$ 年, $SD=3.8$)との間($p<.05$)、N群と身体的虐待群($M=3.8$ 年, $SD=3.2$)との間($p<.01$)で有意差が見られた。

次に問題行動尺度得点の比較を行い、「社会性の問題」($F(2,134)=4.66, p<.05$)、「思考の問題」($F(2,134)=3.19, p<.05$)、「攻撃的行動」($F(2,134)=3.85, p<.05$)、外向尺度($F(2,134)=3.65, p<.05$)、総得点($F(2,134)=4.27, p<.05$)で有意差が見られた。多重比較(TukeyのHSD法)の結果、「社会性の問題」ではN群($M=2.39, SD=2.41$)と身体的虐待群($M=4.70, SD=3.45$)の間で身体的虐待群の得点が有意に高かった($p<.05$)。「思考の問題」(N群： $M=0.24, SD=0.59$, ネグレクト群： $M=0.86, SD=1.90$)、外向尺度(N群： $M=5.37, SD=5.55$, ネグレクト群： $M=9.41, SD=10.58$)、総得点(N群： $M=15.67, SD=11.12$, ネグレクト群： $M=24.52, SD=22.15$)では、いずれもN群に比べネグレクト群の得点が有意に高かった(すべて $p<.05$)。

コンピテンス項目では、きょうだい関係($F(2,134)=10.06, p<.01$)、親子関係($F(2,134)=6.43, p<.01$)、成績($F(2,134)=3.75, p<.05$)で有意差が見られた。多重比較(TukeyのHSD法)の結果、きょうだい関係では、N群($M=2.19, SD=0.52$)と身体的虐待群($M=1.47, SD=0.52$)との間($p<.01$)、ネグレクト群($M=2.00, SD=0.53$)と身

体的虐待群間($p<.01$)でいずれも身体的虐待群の方が、有意に関係が悪かった。親子関係では、N群($M=1.76, SD=0.62$)と身体的虐待群($M=1.35, SD=0.49$)との間($p<.05$)、ネグレクト群($M=1.88, SD=0.57$)と身体的虐待群間($p<.01$)でいずれも身体的虐待群の親子関係が有意に悪かった。成績についてはN群($M=2.37, SD=0.83$)とネグレクト群($M=1.96, SD=0.96$)との間でネグレクト群の成績が有意($p<.05$)に悪いという結果だった。

被虐待体験による正常域、臨床域の比較

各尺度得点をプロフィール表のTスコアにしたがって、正常域、境界域、臨床域に分けた。ここでは境界域を臨床域に含めて何らかのケアが必要な臨床域群とし、正常域群と区別した。A群、N群ごとに臨床域群と正常域群との人数を比較したものをTABLE 7に示す。被虐待体験の有無によって、臨床域群に入る子どもの数に違いがあるのかを検討するため、フィッシャーの直接確率法を行ったところ、「社会性の問題」、「注意の問題」、「攻撃的行動」、外向尺度、総得点で有意(すべて $p<.05$)であった。いずれもA群の臨床域群の割合が多いという結果だった。

TABLE 7 被虐待体験別の臨床域人数

		N群	A群	計	
引きこもり	正常域	46	77	123	
	臨床域	5	14	19	
身体的訴え	正常域	50	86	136	
	臨床域	1	5	6	
不安・抑うつ	正常域	49	85	134	
	臨床域	2	6	8	
社会性の問題	正常域	47	68	115	*
	臨床域	4	23	27	
思考の問題	正常域	47	78	125	
	臨床域	4	13	17	
注意の問題	正常域	49	74	123	*
	臨床域	2	17	19	
非行的行動	正常域	43	65	108	
	臨床域	8	26	34	
攻撃的行動	正常域	48	72	120	*
	臨床域	3	19	22	
内向尺度	正常域	40	66	106	
	臨床域	11	25	36	
外向尺度	正常域	38	51	89	*
	臨床域	13	40	53	
総得点	正常域	38	52	90	*
	臨床域	13	39	52	
	計(人)	51	91	142	

**p* < .05

考 察

児童養護施設入所児の特徴

本研究の児童養護施設入所児のデータを井潤他(2001)と比較すると、特に総得点では、低年齢群男子(本研究 $M=22.20$; 井潤他 $M=16.10$, 以下同様)、高年齢群男子($M=17.36$; $M=11.71$) 低年齢群女子($M=20.6$; $M=14.35$), 高年齢群女子($M=28.28$; $M=11.98$) となり、いずれも施設入所児の得点の高さが目立つ。また、内向尺度では一般の子どもたちと同様に女子が男子より高い傾向が示されたが、外向尺度では男女差が見られなかった。一般の子どもたちと異なり、女子でも男子と同じように外向尺度得点が高いことが特徴として示されている。ほぼすべての尺度において施設入所児の方が高得点を示していることから、児童養護施設に入所している子どもたちは、一般の子どもたちに比べて行動や情緒の問題を抱えているといえる。これは、児童養護施設における不適応、逸脱行動を示す対応困難な子どもの増加という最近の傾向(加賀美, 2001)を裏付けるものといえるかもしれない。特に高年齢群女子の得点の高さから、この年代の女子への対応の困難が推測される。本研究では「身体的訴え」、「社会性の問題」において高年齢群女子が高得点であった。「身体的訴え」については一般的に女子の得点が高い傾向にあり(井潤他, 2001)、施設児も同様の傾向であるといえるが、「社会性の問題」については、一般の子どもたちとは異なる傾向を示している。「社会性の問題」は内容を見ると「行動が幼い」、「大人に頼ろうとする」等であり、社会性の発達の不熟さを示している。これは施設入所児に共通した特徴とも考えられるが、発達への影響の現われ方が男女で異なる可能性があり、特に思春期年代の女子に不熟さが目立ったといえる。「身体的な訴え」や「社会性の問題」は非行や攻撃的な行動に比べ、見過ごされがちな問題ではあるが、今回の結果から、子どもの出すサインを職員はある程度認識しているといえる。このように目立たない問題も思春期女子を中心に施設入所児の特徴と捉えて、適切に対応をしていくことが重要となるだろう。

西澤他(1999)は児童養護施設入所児のトラウマ反応の調査の結果、親との離別体験は養護施設の子どもの不安と怒りに起因する不適応を生じさせると指摘している。本研究での入所理由は親の離婚が最も多く、次いで経済的理由、虐待の順であった。虐待の有無にかかわらず、施設に入所するということは、親や家族との分離を意味し、安定した家族機能が保てない家庭背

景があると考えられる。本研究で見られた施設入所児の行動や情緒の問題得点の高さから、親や家族との分離体験とその背景に推測される不安定な家庭状況が、子どもの行動や情緒に何らかの影響を与えている可能性が示唆される。ただし、今回は対照群となる一般家庭の子どものデータが得られなかった。したがって、一般群と児童養護施設群との比較については、今後、一層の検討が求められる。

被虐待児の特徴

被虐待経験の有無により差があったのは、「社会性の問題」、「思考の問題」、「注意の問題」、「非行的行動」、「攻撃的行動」、「その他の問題」、および外向尺度、総得点で、いずれも被虐待体験群の問題行動得点が高かった。また、虐待を受けた子どもは、対人関係や成績などのコンピテンスでも様々な問題を抱えていることが明らかになった。

Armsden et al. (2000)は、不適切な養育(maltreatment)を受けた子どもたちにCBCLを施行した結果、「社会性」「注意」「非行」「攻撃性」の問題の多さを指摘している。これは本研究の結果とほぼ一致している。「社会性」「注意」「非行」「攻撃性」の問題に関する本研究の結果からは、内向的な問題よりも外向的な問題の方が虐待経験による差が大きいといえる。被虐待経験が特に子どもの外向的な問題行動に影響を及ぼしている可能性が示唆され、杉山・中村(2001)の調査と同じ傾向を示している。ただしCBCLは職員によって評価されたものであり、子どもの内向的な問題よりも、目立つ外向的問題行動を捉えやすいという面を考慮する必要はあるだろう。CBCL項目の中で被虐待群の得点が高かった項目を見ると、明らかに問題行動と思われる項目(例:盗みをする、気分や感情が突然変わる等)に加えて、吐き気や気分の悪さ等の「身体的訴え」に含まれる項目が入っていることは注目すべきである。子どもたちが、虐待の影響をなんらかの身体症状として出す可能性があることを示しており、高年齢群女子の特徴でも指摘したように、子どもたちの「身体的な訴え」への対応に注意する必要があるといえるだろう。

西澤他(1999)の調査では、児童養護施設に入所している虐待を受けた子どもたちによく見られる感情として抑うつと怒りが高いという結果が示されている。CBCLでは「非行」や「攻撃性」といった眼に見える形で表現であるが、西澤他(1999)の調査と同様、行動の背景にある怒りの存在を感じさせる。一方、本研究では「抑うつ・不安」尺度において、A群とN群での有意差は認められなかった。しかし、児童養護施設児全体

の「抑うつ・不安」尺度の得点が井澗他 (2001) の結果 (低年齢男子 $M=2.26$, $SD=2.68$: 低年齢女子 $M=2.28$, $SD=2.68$: 高年齢男子 $M=1.40$, $SD=2.37$: 高年齢女子 $M=1.69$, $SD=2.72$) に比べて低年齢男子以外, 明らかに高いことから, 「抑うつ・不安」はむしろ施設に入所している子どもたち全体が抱えている問題である可能性があり, この点についてさらに検討が必要である。

これまで調査研究だけでなく, 臨床的な立場からも, 虐待を受けた子どもたちに見られる様々な問題が指摘されてきた。大迫 (1999) は虐待を背景にもつ非行小学生の問題について報告しており, 藤岡 (2001) は, 非行の背景としての被虐待体験に言及し, 非行は被虐待経験に対する不適切な対処方法の選択ではないかと指摘している。本研究でも被虐待群における「非行」「攻撃性」の問題得点が高く, 臨床的な立場からの非行と被虐待との関係についての言及を裏付けるものといえる。また, 虐待を受けた子どもの「社会性の問題」や「注意の問題」については, 落ち着きのなさを主訴とする児童養護施設に入所している被虐待児の事例報告 (坪井, 2002) などがあり, 臨床的にも以前から指摘されている。このように, これまで虐待の影響として, 数多く指摘されてきた子どもの問題 (奥山, 1997 : Manly et al., 2001 など) が, 本研究では客観的なツールを用いて実証的に示された。

入所年齢について, 虐待を受けていない子どもたちは比較的早期 ($M=4.8$ 歳) に施設入所となったのに対し, 被虐待群の子どもたちは, ある程度の年齢 ($M=6.3$ 歳) になるまで家庭にいたといえる。入所以前の生活について本研究では調査できなかったが, 家庭で虐待環境に長く曝されていた可能性も高い。虐待の早期発見・介入・保護は重要な課題であり, 子どもの入所以前の環境について, さらに調査が必要であろう。

虐待タイプ別の検討

虐待の種類をタイプ別に分類した場合, ネグレクトが最も多く, ついで身体的虐待であった。心理的虐待や性的虐待はなかなか表面化しにくい虐待であり, 本研究でも数は少なかった。虐待タイプ別の検討では, 「社会性の問題」において特に身体的虐待群は虐待のないN群に比べて問題得点が高かった。身体的虐待群は社会性の発達の未熟さからくる対人関係のトラブルなどの恐れがあり, この点に関する注意が必要であろう。「思考の問題」, 外向尺度, 総得点では, ネグレクト群の得点がN群より高かった。Erickson & Egeland (1996) はネグレクト児の攻撃性, 破壊性, 協調性のなさなどを指摘し, Crittenden (1992) は, ネグレクト児

および身体的虐待とネグレクトの重複児の対人関係の問題と攻撃性の高さを指摘している。Manly et al. (2001) は, 身体的ネグレクト, 情緒的ネグレクト, 身体的虐待, 性的虐待の各群の比較において, いずれの群も外向尺度得点が高いことを示し, どのようなタイプの虐待でも外向的問題行動に影響すると指摘している。本研究で, 直接身体的な暴力を受けていないネグレクト児においても, 外向的問題の高さが示されたことは注目すべきである。攻撃性や非行などの外向的問題の高さは, 文化的背景の異なる欧米の先行研究の結果と同様であり, 虐待を受けたことによる影響の表れとして普遍的な問題といえる。虐待タイプによる多少の差異はあるものの, 虐待を受けたこと自体が, 子どもの行動と情緒の問題に大きな影響を与えるということが重要ではないかといえる。この点については, 虐待タイプだけでなく, 虐待の頻度や程度, 重複などの問題と, 十分なサンプル数での検討が必要という問題があり, 今後の課題として残されている。

コンピテンス項目のうち, 友人関係は多くの問題行動尺度と有意な相関があった。また, きょうだい関係と成績は被虐待群のほうが有意に悪いという結果であった。特に虐待タイプ別の検討では, 対人関係の側面のうち, 親, きょうだいという家族関係で, 身体的虐待群はN群やネグレクト群と比べて関係が悪いという結果であった。これは, ほとんどの子どもが親から身体的虐待を受けたことによる影響と考えられる。一方で, ネグレクト児は親との関係が希薄なため, 職員から見て親子関係が悪いといえるほど, 親との交流がなかった可能性もある。Gauthier, Stollak, Messé, & Aronoff (1996) は被虐待児の愛着スタイルに関して, 身体的虐待児はたとえ虐待でも親の関与があるのに対し, ネグレクト児には親の関与が欠如していることを指摘し, 愛着と臨床症状との関係に言及している。「親との関係」と問題行動尺度の相関が有意でなかった背景を考える際には, 特にネグレクト児の「親との関係」の吟味が不可欠である。今回のCBCLでは職員からみた親子関係であるが, 子ども本人からみた親との関係や, 愛着形成についても調べる必要があるだろう。

本研究で示されたネグレクト児の成績の悪さについては, Wodarski et al. (1990), Kendall-Tackett & Eckenrode (1996) の指摘と一致する。また, Erickson & Egeland (1996) はネグレクトの影響による意欲のなさが成績に反映していると述べている。Hildyard & Wolfe (2002) はネグレクト児について, 学業成績の低さだけでなく, 引きこもりや, 友人関係の狭さ, 内向

問題が深刻であり、早期のネグレクトによって親との愛着が形成されなかったことが、認知や学業など多くの領域の発達に影響すると指摘している。今後の課題として、虐待タイプによる愛着と問題行動やコンピテンスとの関連について検討することが挙げられる。

被虐待児への心理的ケアの必要性

被虐待体験の有無によって、正常域、臨床域(境界域を含む)に分けた場合に差があるかを見たところ、「社会性の問題」、「注意の問題」、「攻撃的行動」、外向尺度、総得点で有意差が認められた。杉山・中村(2001)の結果では、「注意の問題」「非行的行動」「攻撃的行動」のみ被虐待体験の有無で上位5%に入る人数に有意差が見られたとしている。この点は異なるサンプルである本研究の結果と一致する。本研究では臨床域に境界域を含めて臨床域群としたため単純な比較はできないが、被虐待体験のある子どもは、「社会性の問題」でも何らかのケアが必要な陽性群に入る割合が多いということが示されており、社会性の面から対応が必要であるといえる。

Brady & Caraway (2002) は、虐待などの外傷体験を持つ治療施設入所児を対象に TSCC と CBCL による調査を行った結果、性別や複数の外傷体験と、現在のケアに対する満足度が、子どもの示す症状に影響していると述べている。このことから、施設に入所した場合、施設でどのような生活を送ることができるのか、満足度の高いケアがされるのかが問題行動との関係で重要になると考えられる。わが国では平成11年度から、厚生労働省によって児童養護施設に心理職員を配置する予算措置が講じられている。ところが、現実には実施されている施設は限られ、心理職員も非常勤での勤務がほとんどである。本研究の結果から、特に「社会性」、「注意」の問題や「非行」「攻撃性」などとして子どもたちの問題が表面化するケースの多いことが示唆されており、生活場面で子どもたちの問題に対応する必要性が高くなると考えられる。問題を抱えた子ども同士の場合、具体的な生活場面でのトラブルが予測され、その際の適切な対応が重要である。つまり施設の中での子ども集団のケアが必要になると考えられる。安定した愛着関係を形成する上でも、心理職はもとより、実際に生活場面で個別に対応できる職員(ケアワーカー)の加配が不可欠である。このような生活場面を担当するケアワーカーの人員配置について、現在の児童福祉施設最低基準(平成12年厚令128)第7章第42条3項では、児童指導員および保育士は少年6人に対しておおむね1人以上となっている。交代勤務であることを

考えると“18人の子どもを一人の職員でケアする”(加賀美, 2001)時間帯もあり、衣食住の日常生活のケアに加えて心理的なケアも必要な子どもが多いとなると、とても丁寧な個別対応は困難である。被虐待体験のある子どもが児童養護施設に増加している現状では、心理的ケアが十分に出来る体制がとられているとはまだ言いがたく、施設全体での対策が必要である。職員が子どもたちの問題行動の背景を理解することは重要であり、そのためにも子ども一人一人と十分に関わることでできる児童養護施設職員の人員配置の見直しを含めた体制作りが求められる。

まとめと今後の課題

本研究では CBCL を客観的なアセスメントツールとして、児童養護施設に入所している虐待を受けた子どもたちの行動と情緒の問題の特徴を明らかにした。児童養護施設に入所している子どもは、一般の子どもに比べて問題行動尺度の得点が高く、何らかの事情で家族と離れて施設に入所していることが行動や情緒の問題の大きさに影響している可能性が示された。また、児童養護施設に入所している子どもを被虐待体験の有無によって被虐待体験のある群(A群)と、被虐待体験のない群(N群)に分けたところ、被虐待体験が子どもの行動や情緒の問題に大きな影響を及ぼすことが確認された。特に虐待を受けたA群のほうが、臨床的に何らかのケアが必要な子どもが多いことが示された。「社会性」や「注意の問題」、「非行」、「攻撃性」といった問題行動を示す子どもが多いことが明らかになり、施設内での対応が困難になる可能性が浮かび上がった。虐待タイプ別の検討で、身体的虐待とネグレクトでは、子どもの示す問題に違いがある可能性が示された。虐待を受けた子どもたちの問題行動に対しては、生活場面での適切な対応が重要であり、心理職のみならず、子どもと個別に関わることでできる職員の加配など、施設の人員配置の見直しも含めた体制作りの必要性が示唆された。

今後は対象を増やして入所前の生活、虐待の内容・程度と行動や情緒の問題との関連を明らかにしていくこと、たとえ虐待を受けても、その後の回復につながる要因を明らかにしていくことなどが課題として残されている。

引用文献

- Achenbach, T. M. 1991 *Integrative guide for the 1991 CBCL/4-18, YSR, and TRF profiles.*

- Burlington, VT : University of Vermont.
- American Psychiatric Association 1994 *Quick reference to the diagnostic criteria from DSM-IV*. Washington, D.C. : Author.
- Armsden, G., Pecora, P. J., Payne, V. H., & Szatkiewicz, J. P. 2000 Children placed in long-term foster care : An intake profile using the Child Behavior Checklist/4-18. *Journal of Emotional & Behavioral Disorders*, 8, 49-65.
- Brady, K. L., & Caraway, S. 2002 Home away from home : Factors associated with current functioning in children living in a residential treatment setting. *Child Abuse & Neglect*, 26, 1149-1163.
- Crittenden, P. M. 1992 Children's strategies for coping with adverse home environments : An interpretation using attachment theory. *Child Abuse & Neglect*, 16, 329-343.
- Erickson, M. F., & Egeland, B. 1996 Child neglect. In J. Briere, L. Berliner, J. A. Bulkley, C. Jenny, & T. Reid (Eds.), *The APSAC handbook on child maltreatment*. Thousand Oaks, CA : Sage Publications. Pp.4-20.
- 藤岡淳子 2001 非行の背景としての児童虐待 臨床心理学, 1, 771-776. (Fujioka, J. 2001 Juvenile delinquency and child abuse. *Japanese Journal of Clinical Psychology*, 1, 771-776.)
- Gauthier, L., Stollak, G., Messé, L., & Aronoff, J. 1996 Recall of childhood neglect and physical abuse as differential predictors of current psychological functioning. *Child Abuse & Neglect*, 20, 549-559.
- Hildyard, K. L., & Wolfe, D. A. 2002 Child neglect : Developmental issues and outcomes. *Child Abuse & Neglect*, 26, 679-695.
- 井瀬知美・上林靖子・中田洋二郎・北 道子・藤井浩子・倉本英彦・根岸敬矩・手塚光喜・岡田愛香・名取宏美 2001 Child Behavior Checklist/4-18 日本語版の開発 小児の精神と神経, 41, 243-252. (Itani, T., Kanbayashi, Y., Nakata, Y., Kita, M., Fujii, H., Kuramoto, H., Negishi, T., Tezyuka, M., Okada, A., & Natori, H. 2001 Standardization of the Japanese version of the Child Behavior Checklist/4-18. *Psychiatry et neurologia Paediatrica Japonica*, 41, 243-252.)
- 加賀美尤祥 2001 児童養護施設の現状と課題 小児の精神と神経, 41, 229-231. (Kagami, Y., 2001 Current conditions and problems of children's homes. *Psychiatry et Neurologia Paediatrica Japonica*, 41, 229-231.)
- Kendall-Tackett, K. A., & Eckenrode, J. 1996 The effects of neglect on academic achievement and disciplinary problems : A developmental perspective. *Child Abuse & Neglect*, 20, 161-169.
- Manly, J. T., Kim, J. E., Rogosch, F. A., & Cicchetti, D. 2001 Dimensions of child maltreatment and children's adjustment : Contributions of developmental timing and subtype. *Development and Psychopathology*, 13, 759-782.
- 西澤 哲・中島健一・三浦恭子 1999 養護施設に入所中の子どものトラウマに関する研究—虐待体験と TSCC によるトラウマ反応の測定— 日本社会事業大学社会事業研究所
- 奥山真紀子 1997 被虐待児の治療とケア 臨床精神医学, 26, 19-26. (Okuyama, M. 1997 Treatment and care for abused children. *Japanese Journal of Clinical Psychiatry*, 26, 19-26.)
- 大迫秀樹 1999 虐待を背景にもつ非行小学生に対する治療教育 心理臨床学研究, 17, 249-260. (Ohsako, H. 1999 Therapeutic education for a delinquent elementary schoolboy who had been abused. *Journal of Japanese Clinical Psychology*, 17, 249-260.)
- 斉藤 学 2001 全国養護施設に入所してきた被虐待児とその親に関する研究 子どもの虐待とネグレクト, 3, 332-360. (Saito, S. 2001 The study of abused children and their parents in the children protective institutions throughout Japan. *Japanese Journal of Child Abuse and Neglect*, 3, 332-360.)
- 坂野雄二・佐藤健二・佐々木和義・久保義郎・坂爪一幸・土肥夕美子・市井雅哉 1995 Child Behavior Checklist (CBCL) 日本版による自閉性障害の診断と評価 : CBCL の臨床的応用可能性の検討 安田生命研究助成論文集, 31, 32-41.
- 社会福祉法人大阪ボランティア協会編集 2001 福祉小六法 中央法規
- 菅原ますみ・北村役則・戸田まり・島 悟・佐藤達哉・向井隆代 1999 子どもの問題行動の発達 :

- Externalizing な問題傾向に関する生後11年間の縦断研究から 発達心理学研究, **10**, 32-45. (Sugawara, M., Kitamura, T., Toda, M. A., Shima, S., Sato, T., & Mukai, T. 1999 Development of problem behavior : A longitudinal study of externalizing problems from infancy to middle childhood. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **10**, 32-45.)
- 杉山登志郎・中村素子 2001 発達の視点からみた子ども虐待の後年への影響とその治療—被虐待児の年齢による症状の違いと治療的対応を巡って—安田生命研究助成論文集, **37**, 53-62.
- 諏訪城三 1995 被虐待児117例の検討—臨床所見および虐待の背景について— 日本小児科学会雑誌 **99**, 2069-2077. (Suwa, S. 1995 Clinical analysis of 117 abused children. *Journal of the Japan Pediatric Society*, **99**, 2069-2077.)
- 高橋正彦 2000 施設における被虐待児の理解と援助, 子どもの虐待とネグレクト, **2**, 211-223. (Takahashi, M. 2000 Understanding and support of young abuse victims placed in social institutions. *Japanese Journal of Child Abuse and Neglect*, **2**, 211-223.)
- 戸ヶ崎泰子・坂野雄二 1998 児童期・思春期の問題行動の評価—Child Behavior Checklist (CBCL) 日本版による診断と評価— 季刊精神科診断学, **9**, 235-245. (Togasaki, Y., & Sakano, Y. 1998 The assessment of behavioral problems in childhood and adolescence : The assessment and diagnosis by Child Behavior Checklist Japanese version. *Archives of Psychiatric Diagnosis and Clinical Evaluation*, **9**, 235-245.)
- 坪井裕子 2002 児童養護施設におけるネグレクトされた男児のプレイセラピー—CIの中の「怪獣」をめぐる— 心理臨床 名古屋大学心理発達相談室紀要, **17**, 105-114.
- Wodarski, J. S., Kurtz, P. D., Gaudin, J. M., & Howing, P. T. 1990 Maltreatment and the school-aged child : Major academic, socioemotional, and adaptive outcomes. *Social Work*, **35**, 506-513.
- ZERO TO THREE/National Center for Infants, Toddlers, and Families 本城秀次・奥野 光 (訳) 2001 精神保健と発達障害の診断基準—0歳から3歳まで— ミネルヴァ書房 (ZERO TO THREE/National Center for Infants, Toddlers, and Families 1994 *DIAGNOSTIC CLASSIFICATION : 0-3, Diagnostic classification of mental health and developmental disorders of infancy and early childhood*. Washington, D.C. : ZERO TO THREE/National Center for Infants, Toddlers, and Families.)

謝 辞

調査にご協力くださいました児童養護施設の職員の皆様方と、李明憲先生（国立病院機構三重病院）に厚く御礼申し上げます。また、本研究をすすめるにあたりご指導くださいました名古屋大学蔭山英順先生、金子一史先生に感謝いたします。

(2003.9.5 受稿, '04.11.20 受理)

Behavioral and Emotional Characteristics of Abused Children : Child Behavior Checklist/4-18 (CBCL)

HIROKO TSUBOI (GRADUATE SCHOOL OF EDUCATION AND HUMAN DEVELOPMENT, NAGOYA UNIVERSITY)
JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2005, 53, 110-121

The purpose of the present study was to clarify behavioral and emotional characteristics of abused children who had been placed in children's-homes. We asked children's-home caretakers to complete Child Behavior Checklist (CBCL) forms for 142 children (40 boys aged 4-11 ; 45 boys aged 12-18 ; 25 girls aged 4-11 ; 32 girls aged 12-18). The results revealed that the girls had higher Internalizing scores than the boys. Most notably the 12-18-year-old girls had higher scores for Somatic Complaints and Social Problems. Comparison between the children who had been abused ($N=91$) and those who had not ($N=51$) showed that the former had significantly higher scores for Social Problems, Thinking Problems, Attention Problems, Delinquent Behavior, Aggressive Behavior, Externalizing, and Total Problems. The abused group had more children who were considered to be clinically significant because of their scores on Social Problems, Attention Problems, Aggressive Problems, Externalizing, and Total Problems. The present results reveal the behavioral and emotional problems of children who have been abused and indicate the necessity of providing psychological care for them.

Key Words : Child Behavior Checklist/4-18 (CBCL), child abuse, children's home, behavioral and emotional problems, children and adolescents who had been abused